

大東文化大学 東洋研究所所報

2018.9 No.69

目次

岡倉天心研究班と天心研究 篠永 宣孝……………1	2018年度 人事・名簿……………8
2018年度 東洋研究所共同研究課題……………2・3	新刊案内、2017年発行『東洋研究』……………9・10
2017年度 東洋研究所共同研究班活動報告…4・5・6	2017年度 東洋研究所会議報告／理念・目的…11
〔国際交流講演会〕江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額 —群馬県世良田東照宮本の伝来と系統— 大東文化大学非常勤講師 オレグ・プリミアニ…7	2018年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ…12

岡倉天心研究班と天心研究

篠永 宣孝

東洋研究所に「岡倉天心研究班」が設立されることになる経緯は、天心の曾孫に当たる岡倉登志本学教授が早期退職されることを伺ったときである。登志氏のご尊父岡倉古志郎が1982年に東洋研究所専任研究員教授、翌年同所長に就任されて本格的に天心研究に着手され、ご尊父没（2001年）後その研究を継承されていた登志氏——岡倉天心研究会「鵬の会」を主宰し会誌『鵬』を刊行——が本学を去られることで、本学における天心直系の古志郎・登志氏による天心研究の流れが途切れてしまうは返す返すも残念でならなかった。そこで、私が研究員として所属する東洋研究所の所長や所員に登志氏を中心とした天心研究班の設置（日本における天心研究の拠点となるべく）を要請した。その結果、2012年に登志氏を始めとする「鵬の会」メンバーの協力も得てでき上がったのが東洋研究所・岡倉天心研究班（主任田辺清本学教授）である。そうして、該天心研究班の研究成果として、2014年に『岡倉天心—伝統と革新』、2016年に『岡倉天心—明治国家形成期における「日本美術」をいづれも東洋研究所から公刊することができた。現在研究班は、「岡倉天心（覚三）に於ける『伝統と近代』』というテーマで研究活動を継続しており、近近その研究成果の公表（刊行）を目指している。

ちなみに、天心研究には素人であった私も「岡倉天心研究班」、「鵬の会」のメンバーに加えていただいたのを切っ掛けに、ここ数年来鋭意天心研究に取り組んでいる。現在は「岡倉天心の近代化・産業革命観—岡倉天心とウィリアム・モリス」と題して、日本美術院派・日本画革新運動—輪郭線を廃した無線描法、色彩点描技法、空気遠近法を

試みるなど日本画の革新を企てた—を牽引した岡倉天心とアーツ・アンド・クラフツ運動〔Arts and Crafts movement〕—ヴィクトリア盛期、産業革命の結果として大量生産による安価で粗悪な製品があふれていた状況を批判して、中世の手仕事に帰り、生活と芸術の統一を主張して開始した美術工芸運動—を主導したウィリアム・モリスとの比較研究を行っている。イギリス・ヴィクトリア盛期から末期を生きたウィリアム・モリス〔William Morris, 1834-96〕とワン・ジェネレーション若い日本・明治期を生きた岡倉天心（1863-1913）の「思想と行動」は、彼らの生きた生活空間（地域・国）や時代背景が全く異なっていたにも拘らず、驚くほど類似している。

例えば、天心による日本美術院の伝統美術復興運動（日本美術院の五浦への移転）は、モリスによるマートン・アベイ〔Merton Abbey〕—モリスが1881年に芸術と生活の一致・中世美術の復活を唱えてロンドン郊外に開いた美術工房およびその一団の人々の美術工芸運動とまさしく符合する。また、明治初年代の過激な「廃仏毀釈」の嵐が過ぎ去った後、天心は古美術調査や古社寺の宝物調査活動を通じてそれらの価値を認識してその保護・修復・復興に努め、1896年の「古社寺保存会」の設置や翌97年の「古社寺保存法」の制定に尽力して文化財保存事業（とりわけ法隆寺壁画保存）に深く関わっていったことは、モリスが1877年に「古建築物保護協会〔Society for the Protection of Ancient Buildings〕」を創設して歴史的建造物〔とりわけカトリック教会〕保全運動の先頭に立って活動したことと符合するのである。

2018年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同
	期間 2018年度（継続）
	<p>メンバー（18名） 團岡崎邦彦〔主任〕 団村井信幸、篠永宣孝、田中寛、齊藤哲郎、柴田善雅、鹿錫俊 団内田知行、伊藤一彦、上野英詞、植松希久磨、嶋亜弥子、由川稔、鏡屋一、江崎隆哉、小島麗逸、近藤邦康、中島宏</p> <p>概要 研究班の研究計画は3年間の短期計画と10年をかけた長期計画から構成される。</p> <p>まず、20世紀以来の日中関係、中国の対外関係、内政、さらにそこで提起された「世界大同」の事実を検証する。20世紀中国は、帝国主義への抵抗から、建国後平和共存の五原則の提起へと対外関係（世界認識）を変化させ、また中国国内の対内改革は、民衆の自由、民主の要求と社会主義建設を巡って大きく変貌を遂げてきた。その間、平和共存の中国外交や人民公社などの新たな世界、社会モデルが提起され、社会の共存とそれを支える文化革命が求められてきた。これを現代中国の「世界大同」の創造の一部とみて、これを検討していくことである。</p> <p>さらに中国20世紀以来の対外抵抗、対内改革と日本は深く関わりをもっており、課題も多いが、日中間で「世界大同」のモデルを経済から政治、さらに文化面へと実践していくことも可能である。</p> <p>10年長期計画については、1921年から2021年間の中国共産党史の資料整理と100年史研究を進める。</p>
第2班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—
	期間 2017～2019年度（研究期間中）
	<p>メンバー（12名） 団中林史朗〔主任〕 團田中良明 団日吉盛幸、浜口俊裕、小塚由博、藏中しのぶ、宮瀧交二 団福田俊昭、芦川敏彦、大兼健寛、成田守、小林敏男</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』が、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。</p>
第3班	西欧植民地主義再考
	期間 2017～2019年度（研究期間中）
	<p>メンバー（5名） 團山田準〔主任〕 団瀧口明子、齋藤俊輔 団岡倉登志、生田滋</p> <p>概要 西欧植民地主義の成立、発展、思想的背景については数多くの研究がなされて来た。これら西欧植民地主義の歴史研究はヨーロッパと新大陸つまり大西洋世界、ヨーロッパと旧大陸つまりインド洋と太平洋世界を対象とし、それとは別に植民地宗主国の歴史研究が存在した。これら大西洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からはインド洋と太平洋世界における植民地主義が見えてこない。</p> <p>逆にインド洋と太平洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からは、大西洋世界の植民地主義は見えてこない。</p> <p>そこでこの研究班では、大西洋世界、植民地宗主国、インド洋と太平洋世界の3大研究対象を比較統合し、西欧植民地主義を再考することを目的に、いくつかの個別的研究を分担して研究しようとするものである。</p>
第4班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	期間 2016～2018年度（研究期間中）
	<p>メンバー（11名） 團小林春樹〔主任〕 團田中良明 団渡邊義浩、小坂真二、小林龍彦、中村聡、中村士、細井浩志、山下克明、進藤英幸、濱久雄</p> <p>概要 1. 前田尊経閣文庫蔵、『天文要録』（唐・李鳳撰）の巻四「日占」条の二十帳三行の「黄帝三靈符決曰」以下、巻末にいたる部分の訳注を完成し、「『天文要録』の考察〔三〕」として公刊する。2. 小林春樹による、『漢書』の天文占、五行占、災異記事等を中心とした同書の研究書である「『漢書』再考—天文占、五行占、災異記事等を中心とした研究—」も公刊する。</p>
第5班	茶の湯と座の文芸
	期間 2017～2019年度（研究期間中）
	<p>メンバー（14名） 団藏中しのぶ〔主任〕 団相田満、安保博史、矢ヶ崎善太郎、三田明弘、藏田明子、高木ゆみ子、フレデリック・ジラル、王宝平、オレグ・プリミアニ、菅野友巳、笹生美貴子、松本公一、布村浩一</p> <p>概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008（H20）～2017（H29）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻十注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。</p> <p>研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、パリから高木ゆみ子（歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラル（仏教思想史）、中国から王宝平（日本文学）、また、新たに兼任研究員として、松本公一（歴史学・日本文化史学）、オレグ・プリミアニ（日本文学）、藏田明子（国際政治学）、菅野友巳（舞台芸術論）、笹生美貴子（日本文学・中古文学）、布村浩一（日本文学・中古文学）を迎える。</p> <p>また研究参加者として、飯島奨（文化人類学・本学非常勤講師）、加藤泰加子・北井千鶴（裏千家茶道パリ支部）、トーマス・エックホルム（スウェーデン・ヨーデボレ大学研究員）、本学大学院日本語文化学専攻後期課程の郭崇・楊亜麗・楊世謹を加え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。</p> <p>【研究参加者】 飯島奨（文化人類学・本学非常勤講師）、加藤泰加子・北井千鶴（裏千家茶道パリ支部）</p>

第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—
	期間 2018～2020年度（新規）
	メンバー（13名） ㊦吉村武典〔主任〕 ㊦山田準 ㊦原隆一、鈴木珠里、南里浩子、林裕、斎藤正道、中村菜穂、吉田雄介、アブドリ・ケイワン、石井啓一郎、ソレマニエ貴実也、深見和子
概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域にまたがり、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺文化圏を持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与つづけて来た。	
本研究では、第2期まで行ってきた、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。	
第2期までに行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していき、研究成果の公表を積極的に行っていく。	
第7班	岡倉天心（覚三）にとつての「伝統と近代」
	期間 2018～2020年度（新規）
	メンバー（8名） ㊦田辺清〔主任〕 ㊦宮瀧交二、篠永宣孝 ㊦池田久代、岡倉登志、岡本佳子、依田徹、佐藤志乃
概要 岡倉天心（1862-1913）は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を志した。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。	
この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、皇室技芸員選択委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を志して美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。	
岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めて行きたい。	
第8班	南アジア社会における包摂と排除
	期間 2018年度（新規）
	メンバー（8名） ㊦須田敏彦〔主任〕 ㊦篠田隆、石田英明、井上貴子、小尾淳 ㊦片岡弘次
概要 多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、社会を構成する多様な集団間の統合とアイデンティティをめぐる関係も変化し、その結果、基本的人権や国民が平等に享受すべき諸種の権利から「排除」(Exclusion)される個人や集団が生じている。他方、この排除の現実を踏まえたうえで、多様な集団間の統合とアイデンティティの強化、すなわち「包摂」(Inclusion)を求める政治経済社会運動も展開している。	
本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で下層に位置付けられてきた集団を対象として、彼らと社会変動との関わりを「包摂」と「排除」の観点から分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索し「包摂」を求めてきたのか、彼らに対してどのような「排除」の仕組みや圧力が働いてきたのかを、社会や経済を専門とする委員と歴史、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。	

2017年度 東洋研究所共同研究班活動報告

20世紀・22世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同										
第1班	No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数					
	1	①篠永宣孝「フランスにおける『勤工儉学』運動と中国興業銀行」 ②田中寛「大東亜共栄圏下における南方映画工作の一断面—タイの文化映画とタイ映画界、映画戦を例に—」	5月6日	大東文化会館K301	20名					
	2	①嶋亜弥子「深圳市日系企業における中国人従業員の就業実態の変化」 ②小島麗逸「中国の対外投資と一帯一路」 ※小島麗逸「中国経済研究会」(毎月1回)との合同研究会	7月15日	大東文化会館K401	23名					
	3	①高田茂臣(オブザーバ)「関東軍の政治工作と蒙疆政権成立」 ②由川稔「中国周辺諸国と開発金融の動向」	11月25日	大東文化会館K404	16名					
	4	①上野英詞「安全保障の視点から見た中国の“一帯一路”構想の狙い—ユーラシアを西進するチャイナパワーの覇権的拡張とその地政学的影響—」 ※小島麗逸「中国経済研究会」(毎月1回)との合同研究会	12月9日	大東文化会館K401	21名					
	5	①岡崎邦彦「日中関係と中国の政権交代—中国内政・外交・日中関係」 ※小島麗逸「中国経済研究会」(毎月1回)との合同研究会	1月20日	大東文化会館K402	20名					
	6	①岡崎邦彦「国交回復後の日中関係史年表」	3月17日	大東文化会館K301	15名					
【備考(刊行物等)】 (1) 筆者：篠永宣孝 タイトル：『中国興業銀行の崩壊と再建』(単著) 概要：中国興業銀行の発展と崩壊、そしてその再建と発展に関する世界初の本格的実証研究である。 出版社：春風社(2017年12月発行) (2) 筆者：上野英詞 タイトル：『中国の海洋侵出を抑え込む 日本の中防衛戦略』(日本安全保障戦略研究所編・共著) 概要：中国の強引な覇権的拡張主義にどう対応するかを論じた戦略論。 出版社：国書刊行会(2017年9月発行)										
日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—										
第2班	No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数
	1	『藝文類聚』巻47 訓読	4月22日	東洋研共同研究室	9名	7	『藝文類聚』巻48 訓読	10月21日	東洋研共同研究室	6名
	2	『藝文類聚』巻47 訓読	5月27日	東洋研共同研究室	8名	8	『藝文類聚』巻48 訓読	11月25日	東洋研共同研究室	6名
	3	『藝文類聚』巻47 訓読	6月17日	東洋研共同研究室	7名	9	『藝文類聚』巻48 訓読	12月16日	東洋研共同研究室	6名
	4	『藝文類聚』巻47 訓読	7月15日	東洋研共同研究室	8名	10	『藝文類聚』巻48 訓読	1月27日	東洋研共同研究室	6名
	5	『藝文類聚』巻47 訓読	8月26日	東洋研共同研究室	9名	11	『藝文類聚』巻48 訓読	2月17日	東洋研共同研究室	7名
	6	『藝文類聚』巻48 訓読	9月30日	東洋研共同研究室	7名	12	『藝文類聚』巻48 訓読	3月24日	東洋研共同研究室	6名
【備考(刊行物等)】 『藝文類聚(巻四十六) 訓讀付索引』(2018年2月25日発行)										
西欧植民地主義再考										
研究会は研究員の入院や体調不良などにより一堂に会してはできず、メールや授業の合間、研究所の公開講座や会合の時に顔を合わせ、現状報告や相互情報の交換を行った。										
研究テーマ(発表・演題・調査等) 目的：斎藤先生の外国人コミュニティ多文化共生についての発表に基づく日系ブラジルやペルー人の移民の現状調査 成果：コミュニティセンターや商店などは残るものの、インド、ネパール人などが増え、当初の繁栄とは見違える程寂れた印象であった。 開催日時：2018年3月16日 開催場所：群馬県大泉町 調査員：山田準・斎藤俊輔										
第3班	【備考(刊行物等)】 ・滝口明子 『茶の事典』朝倉書店 編集(大森正司他全六名) 〈執筆担当項目〉 第2章 茶の流通と消費 2.2 アジアからヨーロッパ・アメリカへ、2.2.1 「ヨーロッパへの伝播」、2.2.2 「謎の植物、チャ」、2.2.3 「英国紅茶論争」、2.3 茶の世界的流通、2.3.1 「世界商品としての茶」、2.3.2 「東インド会社」、2.3.3 「茶税と密輸」、2.3.4 「インドにおける中国茶樹移植の試みとアッサム種発見」、2.3.5 「茶を運んだ船」 第3章 茶の文化 3.4 欧米の茶文化、3.4.1 「欧米の茶文化概論」、3.4.2 「イギリスを中心とした茶文化の諸相」、3.4.3 「茶道具とマナー」、(99-125頁 198-213頁)									
	・斎藤俊輔 (1) 開催日：2017年10月16日 研究テーマ：「群馬県大泉町と外国人コミュニティ多文化共生について考える」 主催：語学教育研究所研究会 開催場所：語学教育研究所(大東文化大学板橋校舎2号館6階)									

- (2) 開催日：2017年11月5日
 研究テーマ：「東西文化の融合『サンバのまち』群馬県大泉町のいまーブラジルタウンから多文化共生のまちへ」
 第9回「東西文化の融合」国際シンポジウム 異類・妖怪と芸能の東西 東アジアの言語接触と日本語・日本語教育
 主催：大東文化大学大学院外国語学研究所日本語文化学専攻
 共催：大東文化大学外国語学会日本語部会、大東文化大学東洋研究所、語学教育研究所、現代アジア研究所、大東文化大学大学院アジア地域研究科、国際関係学部、大東文化大学国際交流センター
 後援：ESD活動支援センター
 開催場所：大東文化会館
- 研究テーマ：「魅力ある多文化都市をつくるー外国人集住日本一のまち大泉町での経験から」板橋の魅力伝える もてなし英語（中級）
 開催日：2018年1月12・16日
 開催場所：板橋区役所人材育成センター
- (その他)
 〈報告〉2017年7月14日
 内容：「ステートレスネス・アカデミー：無国籍写真展ワークショップ」ワークショップ趣旨説明／総括
 開催場所：大東文化会館
 〈報告書〉2018年3月31日
 共著【2017年度全学プロジェクト事業（公募採択事業）多文化共生リーダー養成プログラム（MLP）推進事業実施報告書】
 大東文化大学外国語学部

唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）

No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数
1	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	5月13日	東洋研共同研究室	3名	5	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	10月28日	東洋研共同研究室	3名
2	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	6月10日	東洋研共同研究室	4名	6	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	1月13日	東洋研共同研究室	3名
3	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	8月5日	東洋研共同研究室	4名	7	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	2月10日	東洋研共同研究室	4名
4	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	9月16日	東洋研共同研究室	3名	8	『天文要録』巻4訓読▶訳注作業	3月10日	東洋研共同研究室	4名

【備考（刊行物等）】

茶の湯と座の文芸

No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時	No.	研究テーマ(発表・演題等)	開催日時
1	茶点ニ出ル意得事 附衣類	4月11日、4月18日、4月25日 毎週火曜	11	点茶之時勝手口開出ル様 附茶碗持出置合事	9月5日、9月6日、9月7日、9月19日、 9月26日 毎週火曜、水曜、木曜
2	口切之時新可用諸具事 附面桶		12		
3	点茶之時茶碗之事 附茶具	5月2日、5月9日、5月16日、 5月30日 毎週火曜	13	棚水指茶具置合事 附紹鴨欄	10月3日、10月10日、10月17日、 10月24日、10月31日 毎週火曜
4	茶巾之事 附寸法		14	水櫃取扱柄杓蓋置取様 附点茶時置所	
5	碗中茶具之事	6月6日、6月9日、6月13日、 6月16日 毎週火曜、金曜	15	点茶之時面桶閉日置用事 附水櫃所望	11月14日、11月21日、11月28日、12月 5日、12月12日、12月19日 毎週火曜
6	茶筌之事 附出处				
7	柄杓之事 附寸法名所	6月20日、6月27日、7月4日 毎週火曜	16	校正	1月19日～21日(初校)、1月30日～31日(再 校)、2月2日～2月4日(三校)、2月8日(念校)
8	竹蓋置寸法之事 附栄螺隠家穂屋				
9	水櫃之事 附襖蓋棒ノ先	7月11日、7月14日、7月18日、 7月21日、7月25日 毎週火曜、金曜			
10	幅紗物之事				

No.	研究テーマ(発表・演題等)	発表者	開催日時	開催場所	参加人数
1	第九回「東西文化の融合」国際シンポジウム「異類・妖怪と芸能の東西」(東洋研究所共催) 第一部ヨーロッパの異類・妖怪と芸能・第二部アジアの異類・妖怪と芸能	安保博史、高木ゆみ子、 オレグ・プリミアニ、 菅野友巳、藏中しのぶ	11月5日	大東文化会館	150名
2	東洋研究所主催・公開講座「アジアの民族と文化」講演 「李白伝説と蕪村の文事」	安保博史	11月23日	大東文化会館	36名
3	東洋研究所研究活動報告会「国際交流講演会」講演 「江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額ー群馬県世良田東照宮本の伝来と系統」	オレグ・プリミアニ	2月17日	大東文化会館	40名

No.	刊行物	執筆者	出版社	概要
1	古代文学と隣接諸学2『古代の文化圏とネットワーク』	藏中しのぶ(編者)	竹林舎	論文集
2	・『茶譜』と『茶譜注釈』(仏文)研究誌『ebisu』第54号 ・「藤原頼長と音楽ー「台記」を中心に(二)ー鳥羽院皇子女誕生をめぐってー」	高木ゆみ子	・東京日仏会館 ・大東文化大学 東洋研究所	王朝期の音楽活動 の研究
3	『東洋研究』206号 「豊子檀訳『源氏物語』における注釈態度ー谷崎潤一郎『源氏物語』(旧訳)の位置づけをめぐってー」	笹生美貴子	大東文化大学 東洋研究所	『源氏物語』 中国語訳の研究
4	『茶譜』巻十一注釈(2018年2月20日刊行)	藏中しのぶ編	大東文化大学 東洋研究所	江戸期茶の湯類書 の注釈

西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—						
No.	研究テーマ（発表・演題等）	担当者	開催日時	開催場所	参加人数	
第6班	1	班員による近況活動報告および2017年度の研究計画について—(原隆一、吉村武典)		5月28日	大東文化会館	10名
	2	①イラン留学とイランにおけるイスラーム史研究環境 ②アフガニスタンにおける国家建設とカナダの介入政策 ③イランの環境問題にみるイスラームの言説	①水上遼、②藏田明子、 ③阿部哲	7月9日	大東文化会館	12名
	3	①ペルセポリスとノウルーズ ②イスラーム・ガラスにおけるブハラ・オアシス出土ガラスの位置づけ～2014～2017年の調査から ③前近代エジプト・カイロの水関連施設と都市生活～2017年度夏期エジプト現地調査報告	①上岡弘二、②真道洋子、 ③吉村武典	10月22日	大東文化会館	12名
	4	①イスラエル文学の＜東洋＞ ②詩人サマド・ヴルグンにみるソヴィエト・アゼルバイジャン的「ヴァタン」の表象とイラン ③書簡集から見るフォルルーグ像： ファルザーネ・ミーラーニー『フォルルーグ・ファッロフザード： 文学的伝記と未発表書簡』より	①細田和江、 ②石井啓一郎、 ③鈴木珠理	1月28日	大東文化会館	12名
【備考】 1. 刊行物など (1) 中村菜穂『血の旗を触れ—ミールザーデ・エシュギーの政治的著述における詩的言語の諸相』（『東洋研究 第206号』、大東文化大学東洋研究所、2017年12月、PP.119-155） (2) 原 隆一、中里浩子 編『大野盛雄フィールドワーク軌跡Ⅱ —1960年代～1970年代におけるイランとアフガニスタン農村調査から—』（2018年3月20日） (3) 吉村武典『西アジアの連帯・統合：イブン・ハルドゥーン『歴史序説』と連帯意識（アサビーヤ）を手掛かりに』（権寧俊編『アジア地域の交流と統合』第12章、新潟県立大学、2018年3月、pp.123-144） 2. 講演会など (1) 原 隆一「ペルシアの伝統技術—沙漠の知恵、したたかに生きるイラン人—」東洋研究所公開講座（2017年11月16日、大東文化会館）						
岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」						
No.	研究テーマ（発表・演題等）（岡倉天心研究班・「鵬の会」との共催研究会）		開催日時	開催場所	参加人数	
第7班	1	「岡倉覚三とDNA—子息、娘、孫たち」（岡倉登志）	8月5日	大東文化大学 板橋校舎 3号館 205教室	10名	
	2	「明治12（1879）年のE・モースとW・ビゲロウの埼玉訪問」（宮瀧交二）				
	3	「鵬の会」動向ほか（塩出明彦）				
	4	「天心会動向」ほか（田辺清）				
第7班	1	「天心の思想と龍」（岡倉登志）	12月24日	大東文化会館 K404 研修室	10名	
	2	「龍を描く—天地の気（茨城県天心記念五浦美術館20周年記念展）について」（荻原延元）				
	3	「『鵬』7号刊行について」ほか（宮瀧交二）				
	4	「鵬の会」動向ほか（塩出明彦）				
	5	「天心班動向」+「ゴッホ展」並びに「北斎とジャポニスム展」について（田辺清）				

〔国際交流講演会〕

江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額—群馬県世良田東照宮本の伝来と系統—

大東文化大学非常勤講師 オレグ・プリミアーニ

2018.2.17(土)10:00～11:30 大東文化会館 4階 K-0302 研修室

東照宮は、江戸幕府を開いた徳川家康を「東照大権現」として祭祀する神社であり、現在、全国各地に五〇〇社以上が存在する。徳川氏発祥の地とされる上野国徳川郷（群馬県太田市）の世良田東照宮は、寛永二十一年（一六四四）、三代将軍家光が日光東照宮から勧請し、社殿の一部を移築したものであり、群馬県指定重要文化財の三十六歌仙扁額（以下、世良田本と略称）が伝来する。

三十六歌仙扁額とは、東照宮建築の基本様式とされ、三十六首の歌仙和歌に歌人の肖像画を添えた三十六面の扁額が、神社の拝殿内部の上壁を囲むようにして配される。

世良田本の伝来について、額賀大直編『東照宮宝物志』（一九二七年、日光東照宮）は、元和年間日光東照宮に奉納され、世良田東照宮が完成した寛永二十一年（一六四四）に神饌・鎧・太刀・東照大権現勅額とともに移管されたとする。一方、日光東照宮には、元和三年（一六一七）の後水尾天皇宸翰の三十六歌仙扁額（日光本）が伝来する。

もし、世良田本が日光東照宮から移管されたものであるならば、元和年間、日光東照宮にはふたつの三十六歌仙扁額が存在したことになる。

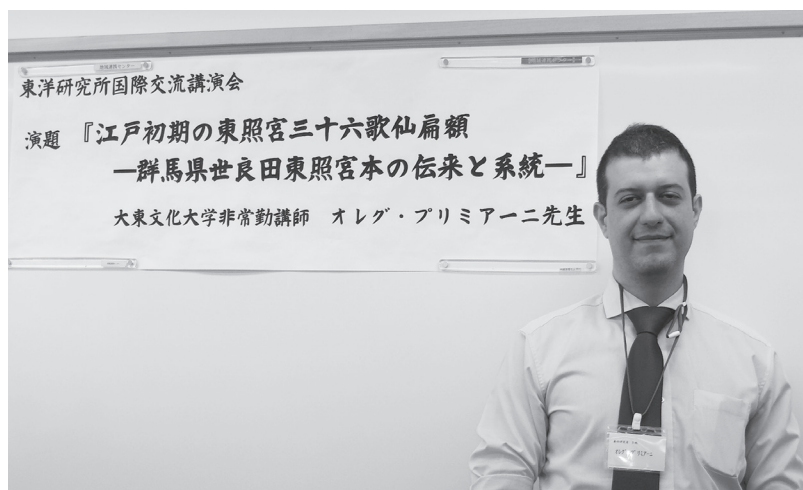
世良田本の歌仙絵について、美術史の松木寛氏

（『世良田東照宮の三十六歌仙絵額』『東京国立博物館美術誌』394号、一九八四年、東京国立博物館）は、その画風から落款に見える狩野源四郎（一六一三～一六八五）・休白（一五七七～一六五四）・元俊（一五八八～一六七二）の実作であり、寛永末年に制作と指摘された。

さらに、日光本の歌仙和歌本文は、二代将軍秀忠の依頼により、後水尾天皇が「世尊寺芳翰」を「模写」したものである（「十一月晦、曼殊院門跡良恕法親王宛、後水尾天皇宸翰」『久能山叢書第四編資料編下』一九七六年、久能山東照宮社務所）。

もし、世良田本が日光東照宮から移管されたものであるならば、その歌仙和歌本文は、日光本、さらにはその祖本である「世尊寺芳翰」に一致するはずである。

世良田本（藤原仲文一首は剥落）と日光本の歌仙和歌本文を精査したところ、両者は十六首が一致し、十九首が異なっていた。歌仙和歌が一致する十六首のうち、四首の散らし書きの書式はあきらかに異なる。このことから、世良田本は、元和年間日光東照宮にあった後水尾天皇宸翰の日光本ではないと考えられる。



■名簿

東洋研究所管理委員会委員（8名）

- 1 岡崎 邦彦（所長兼事務長・東洋研究所専任研究員 教授）
- 2 山田 準（東洋研究所専任研究員 教授）
- 3 中林 史朗（兼任研究員 文・中国文学科 教授）
- 4 宮瀧 交二（兼任研究員 文・英米文学科 教授）
- 5 篠永 宣孝（兼任研究員 経・社会経済学科 教授）
- 6 田辺 清（兼任研究員 国・国際文化学科 教授）
- 7 浜口 俊裕（兼任研究員 文・日本文学科 准教授）
- 8 滝口 明子（兼任研究員 国・国際関係学科 教授）

専任研究員（4名）

- 1 山田 準 教授（東西交渉史・貿易史）
- 2 岡崎 邦彦 教授（中国政治経済）
- 3 小林 春樹 准教授（東洋歴史学）
- 4 田中 良明 准教授（中国思想史）

兼任研究員（21名）

- 1 日吉 盛幸（文・日本文学科 教授）
- 2 浜口 俊裕（文・日本文学科 准教授）
- 3 中林 史朗（文・中国文学科 教授）
- 4 村井 信幸（文・中国文学科 准教授）
- 5 小塚 由博（文・中国文学科 准教授）
- 6 宮瀧 交二（文・英米文学科 教授）
- 7 篠永 宣孝（経・社会経済学科 教授）
- 8 齋藤 俊輔（外・英語学科特任講師）
- 9 藏中しのぶ（外・日本語学科 教授）
- 10 田中 寛（外・日本語学科 教授）
- 11 齊藤 哲郎（法・政治学科 教授）
- 12 藏田 明子（法・政治学科 研究補助員）
- 13 柴田 善雅（国・国際関係学科 教授）
- 14 篠田 隆（国・国際関係学科 教授）
- 15 滝口 明子（国・国際関係学科 教授）
- 16 田辺 清（国・国際文化学科 教授）
- 17 石田 英明（国・国際文化学科 教授）
- 18 須田 敏彦（国・国際関係学科 教授）
- 19 鹿 錫俊（国・国際文化学科 教授）
- 20 吉村 武典（国・国際文化学科 講師）
- 21 小尾 淳（国・国際文化学科 助教）

事務室（1名）

- 1 下浅 聡子（臨時職員）

横山 美智子（2018年7月1日付）
文学部事務室専門課長に配置換え

兼任研究員（55名）（新任含む）

- 1 相田 満（国文学研究資料館准教授）
- 2 芦川 敏彦（浜松学芸中・高等学校講師）
- 3 アブドリ・ケイワン（神奈川大学経済学部非常勤講師）
- 4 鏡屋 一（目白大学外国語学部教授・目白大学副学長）
- 5 安保 博史（群馬県立女子大学教授）
- 6 生田 滋（大東文化大学名誉教授）
- 7 池田 久代（皇學館大学・同志社女子大学非常勤講師）
- 8 石井 啓一郎（三菱電機株式会社）
- 9 伊藤 一彦（一般社団法人中国研究所理事）
- 10 上野 英詞（日本安全保障戦略研究所 上席研究員）
- 11 植松 希久磨（大東文化大学非常勤講師）
- 12 内田 知行（大東文化大学名誉教授）
- 13 江崎 隆哉（大東文化大学・明治大学・法政大学非常勤講師）
- 14 王 宝平（浙江商大東方語言文化院教授、二松学舎大学教授）
- 15 大兼 健寛（理学・作業 名古屋専門学校専任講師）
- 16 岡倉 登志（大東文化大学名誉教授）
- 17 岡本 佳子（国際基督教大学アジア文化研究所研究員）
- 18 オレグ・プリマール（大東文化大学非常勤講師）
- 19 片岡 弘次（大東文化大学名誉教授）
- 20 菅野 友巳（大東文化大学非常勤講師）
- 21 小坂 真二（陰陽道研究者）
- 22 小島 麗逸（大東文化大学名誉教授）
- 23 小林 龍彦（前橋工科大学名誉教授）
- 24 小林 敏男（大東文化大学名誉教授）
- 25 近藤 邦康（東京大学名誉教授）
- 26 斎藤 正道（在テヘラン日本大使館専門調査員）
- 27 笹生 美貴子（大東文化大学非常勤講師）
- 28 佐藤 志乃（公益財団法人 横山大観記念館 学芸主任）
- 29 嶋 亜弥子（元・在中国日本大使館経済部専門調査員）
- 30 フレデリック・ジラル（フランス極東学院教授）
- 31 進藤 英幸（元・無窮会 東洋文化研究所所長）
- 32 鈴木 珠里（大東文化大学非常勤講師）
- 33 ソレマニエ貴実也（日本建築学会、地中海学会）
- 34 高木 ゆみ子（パリ・東アジア文明研究センター研究員）
- 35 中島 宏（一般社団法人中国研究所顧問）
- 36 中村 聡（玉川大学教授）
- 37 中村 士（元・帝京平成大学教授）
- 38 中村 菜穂（大東文化大学非常勤講師）
- 39 成田 守（大東文化大学名誉教授）
- 40 南里 浩子（東京国際大学非常勤講師）
- 41 濱 久雄（元・無窮会専門図書館長）
- 42 林 裕（福岡大学商学部准教授）
- 43 原 隆一（大東文化大学名誉教授）
- 44 深見 和子（東洋文庫 ペルシャ語関係資料臨時職員）
- 45 福田 俊昭（大東文化大学名誉教授）
- 46 布村 浩一（立正大学、埼玉県立松伏高等学校非常勤講師）
- 47 細井 浩志（活水女子大学教授）
- 48 松本 公一（池坊短期大学教授）
- 49 三田 明弘（日本女子大学人間社会学部文化学科教授）
- 50 矢ヶ崎 善太郎（京都工芸繊維大学准教授）
- 51 山下 克明（国際日本文化研究センター共同研究員）
- 52 由川 稔（大東文化大学非常勤講師）
- 53 吉田 雄介（神戸学院大学非常勤講師）
- 54 依田 徹（公益財団法人 遠山記念館 学芸員）
- 55 渡邊 義浩（早稲田大学文学学術院教授）

『藝文類聚』(巻46) 訓讀付索引

大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林史朗

2018年2月25日発行／B5判 45, 33頁／ISBN 978-4-904626-32-0 C3001／頒価¥3,000(税別)

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

歴史研究者からの要望に伴い、前巻45以降職官部の読解に着手している。

本巻には『藝文類聚』巻46職官部2(太尉・太傅・太保・祭酒・博士)の訓読文・校異・注(典拠)・索引を収めている。

《既刊》巻1～巻16、巻45、巻80～89



『茶譜』巻10 注釈

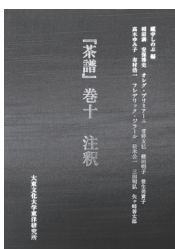
藏中しのぶ 編 相田 満, 安保 博史, フレデリック・ジラルール, オレグ・プリミアニーニ, 菅野 友巳, 藏田 明子, 笹生 美貴子, 布村 浩一, 松本 公一, 高木 ゆみ子, 三田 明弘 矢ヶ崎善太郎 共著

2018年2月26日発行／B5判 237頁／ISBN 978-4-904626-31-3 C3076／頒価¥11,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本(国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本)すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。

《既刊》巻1～巻9



大野盛雄フィールドワークの軌跡Ⅱ

——1960年代～1970年代のイランとアフガニスタン農村調査から——

原 隆一・南里 浩子 編

2018年3月20日発行／B5判 223頁／ISBN 978-4-904626-33-7 C3039／頒価7,000円(税別)

本書は、『大野盛雄フィールドワークの軌跡』シリーズ(全5巻予定)の第2巻目にあたる。すでに、第1巻(総論編)で、大野氏が1950年代前半の日本漁村調査からスタートし、1950年代後半の南米日系移民開拓村調査、1960年代から亡くなる2001年まで調査拠点を西アジア地域(イラン、アフガニスタン、トルコ)へと大きく移し研究に専念した50年間の研究軌跡を追った。

今回の第2巻では、1960年代前半(1963年、1964年、1966年)に氏が単独でおこなったイランの5つのむらの調査、1970年からはじまる全3回の科研費による海外共同調査(『西アジア農村の人文地理学的調査』)、すなわち、1970年のアフガニスタンの2つのむら(第1次調査)、1972年のイラン南部ボレノウむら(第2次調査)、1974年の同じくイラン南部ヘイラーバードむら(第3次調査)の20年間の調査研究に焦点をあてて、その軌跡を追ったものである。

この時期は、大野氏が年齢的にも40代にあたり、フィールドワーカーとしてまさに油がきった頃にあたる。一次資料を読み返してみると、調査研究にける氏の情熱や息吹といったものがひしひしと伝わってくる。フィールド調査に邁進する一方、他方で調査スタイルや研究そのものにたいする思想といったものに悩みながら模索している様子がうかがえる。長期にわたる定点調査方法、イスラム世界へ女性調査員の参加、これまでおこなってきた農村の社会経済構造のみを客観的に調べる調査に疑問をもちはじめ、農民像を追求する「主観的」という新しい試みに挑戦する。

この時期に収集された一次資料は、氏の研究業績上でも密度が濃くもっとも重要なものであり、後の研究者たちが継続調査する上での貴重な基礎資料となっている。



第204号 (2017年7月25日発行)

山下 克明／式神の実態と説話をめぐって

小林 春樹／板野長八の「漢王朝神話」論 再批判

渡邊 義浩／干宝の『晋紀』と「左伝体」

篠永 宣孝／フランスにおける「勤工儉学」運動と中国興業銀行

田中 寛／大東亜共栄圏下における異言語接触の一断面

— “大東亜語学” と南方日本語普及工作の実態—

第205号 (2017年11月30日発行)

福井 重雅／『塩鉄論』と『穀梁伝』

濱 久雄／顧炎武の易学思想—『日知録』を中心として—

中村 ^{つこう}士／天文占書中の数値データ検証の試み

中村 ^{さとし}聡／宣教師たちは儒教をどう捉えたのか

岡倉 ^{たかし}登志／「アフリカ分割期」のスーダン—マフディー「国家」とヨーロッパ列強（下）

第206号 (2017年12月25日発行)

相田 満／観相書『神相全編』の日本における受容—『南総里見八犬伝』の『神相全編正義』享受と併せて—

笹生 美貴子／豊子愷訳『源氏物語』における注釈態度—谷崎潤一郎『源氏物語』（旧訳）の位置づけをめぐって—

高木 ゆみ子／藤原頼長と音楽—『台記』を中心に（二）—鳥羽院皇子女誕生をめぐって—

中村 菜穂／血の旗を振れ—ミールザーデ・エシュギーの政治的著述における詩的言語の諸相—

植松 希久磨／中国語における新語の研究—「現代漢語詞典 第7版」の語彙を中心として—

第207号 (2018年1月25日発行)

田中 良明／校本『乾象新書』と『乾象通鑑』に於ける『漢書』の引用

柴田 善雅／第1次大戦終結前満洲における日系銀行

嶋 亜弥子・西野 真由／深圳市日系企業における中国人従業員の就業実態と定住意識

岡崎 邦彦／西安事変と周恩来（下）—周恩来工作と周・蔣会談

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 2号館 B1
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-5-4
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平 1-10-2
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興二関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。

この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。

この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学付属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく大東文化大

学東洋研究所規定によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。

当初、研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。

時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

(2018年8月)

2017年度 東洋研究所会議報告

■管理委員会

①日時：2017年5月20日（土）15:30～

場所：東洋研究所共同研究室

〔議案〕

1. 2018年度 東洋研究所の共同研究計画書の依頼について
2. 2017年度 専任研究員の兼職について
3. 2017年度 内部監査について

②日時：2017年6月19日（月）18:00～

場所：東洋研究所共同研究室

臨時管理委員会

〔議案〕

1. 2017年度 東洋研究所 教員人事について

③日時：2017年9月1日（金）17:00～

場所：東洋研究所共同研究室

臨時管理委員会

〔議案〕

1. 南アジア社会における包摂と排除
(主任：篠田隆)班の設立の可否について
2. 2017年度東洋研究所教員人事(審査)について
浅沼薫奈 歴史資料館特任講師(契約更新)
田中良明講師昇任について(人事審査委員会答申)

④日時：2017年11月6日（月）10:00～

場所：東洋研究所共同研究室

〔議案〕

1. 南アジア社会における包摂と排除
(主任：須田敏彦先生)班の設立について
2. 2018年度 暦学班成果物(小林春樹著)刊行について

3. 2017年度 事業計画兼業務確認シート(中間報告)及び2018年度 事業計画兼業務確認シートについて

4. 2018年度 東洋研究所予算について

5. 2017年度 内部監査報告書報告

6. 内部監査報告書に対する事実誤認、所見に対する意見について

7. 東洋研究所 内規の改正(修正)について

⑤日時：2018年2月17日（土）12:00～

場所：大東文化会館 K-301研修室

〔議案〕

1. 2018年度 管理委員会委員の任期更新と承認について

2. 内部監査改善命令による内規の廃止および改正について

3. 2018年度 兼任研究員更新及び新任研究員の承認について

4. 2018年度 会議日程および秋の公開講座日程について

5. 『東洋研究』論文執筆依頼及び執筆希望者(メール用)について

6. 東洋研究所 在庫僅少刊行物について

■所内会議 (於：東洋研究所共同研究室)

2017年 4月20日(木) 2017年 5月18日(木)

2017年 6月 8日(木) 2017年 6月22日(木)

2017年 7月20日(木) 2017年 9月14日(木)

2017年 9月28日(木) 2017年10月19日(木)

2017年11月 1日(水) 2017年11月22日(水)

2017年12月21日(木) 2018年 1月24日(水)

2018年 2月22日(木) 2018年 3月28日(水)

2018年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月8日(木) 13:00～15:00 日本画の巨匠 ～横山大観と東洋思想～ 東洋研究所 兼任研究員 佐藤 志乃</p>	<p>我が国の近代化について多く語られてきたのは、西洋からの新しい知識の受容についてであった。しかしながら、江戸期より引き継がれた東洋思想の素養は、明治の知識人たちの精神を支えるものとして残っていた。これは、日本の近代を支えた重要な側面である。</p> <p>今回の講座では、日本画の巨匠・横山大観の画業に焦点をあて、東洋的精神がいかに継承されていたのかを、作品を読み解き、また大観の言説を取りあげることにより考えていきたい。</p>
<p>11月15日(木) 13:00～15:00 元号～その歴史と今～ 東洋研究所 兼任研究員 大東文化大学 名誉教授 小林 敏男</p>	<p>2019(平成31)年4月30日に現在の天皇が退位され、新しい天皇が5月1日に即位されることとなりますが、それにもなって元号が新しくなります。現在、私達は元号(年号)と西暦の二つの紀年法(年を数える方法)を使用しています。元号は中国から伝わったものです。しかし、中国とは違って日本には、日本なりの年号の歴史と特徴があります。また年号(元号)は、君主制(天皇制)と不可欠な関係があり、その「時間の概念」は、おもしろいものがあります。</p> <p>本講演ではその点もふくめて、過去の元号と近代以後の元号との違いについても考えてみたいと思っております。</p>
<p>11月22日(木) 13:00～15:00 中国の虹～そもそも虹なのか～ 東洋研究所 准教授 田中 良明<small>よしあきら</small></p>	<p>雨上がりの空にかかる虹。中国では古くから太陽と反対の方角に見られる現象として知られていました。しかし、彼らが認識していた虹はそれだけではなく、雄雌の区別があり、青く赤く白く黒く、太陽の側にも現れ、水を飲み金を吐く、そうした虹もあると考えられていました。</p> <p>本講座では、虹が中国古典の文学や思想の中でどのように扱われているかを確認しながら、彼らの虹に対する認識が多重的に共存していたことを紹介していきます。</p>

■会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室

■受講料：無料(2018年度より)

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

■定員：50名(先着順)

■受付期間：11月5日(月)まで(消印有効)

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所

TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※ 注意事項

- ・受付は先着順とさせていただきます。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.69

2018年9月21日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>